【幼児教育支援センターが応援する事業】

「幼児教育支援センターが応援する事業」 実践報告

Report of ENPOWERMENT PROJECT that Students Works Supported by Tokoha University Early Childhood Education Support Center

遠藤知里 [1)] 若林知恵子 [2)] 石原 純 [2)]

ENDO Chisato, WAKABAYASHI Chieko, ISHIHARA Jun

[1)] 常葉大学短期大学部保育科 [2)] 常葉大学幼児教育支援センター

要旨

「幼児教育支援センターが応援する事業」とは、短大保育科および保育学部保育学科学生の「保育の学び」を活かした学生主体の活動の活性化を図ることを目的とした学生支援事業で、幼児教育支援センターが2021年度から実施している。これまでに17件の活動を支援し、幼児教育支援センター内からも「保育処」や「とことこピアッツア」という新しいプロジェクトが生まれ、創造的に展開しつつ継続している。本事業の意義は、教職員が協働で本事業に関わることで、学部生・短大生の学びの姿を知り、教育活動に新しい視点を取り入れられること、特に、自然な形で学生個々に眼差す支援を具現化できることである。今後も、よりよい学生支援に繋げたい。

キーワード：サービスラーニング ボランティア活動 応援

1.「幼児教育支援センターが応援する事業」の立ち上げ及び内容

幼児教育支援センターでは、保育学部生、短大保育科生の保育に関する自主的な活動を応援するため、「幼児教育支援センターが応援する事業」を展開している。この事業は、2020年度に計画立案を行い、2021年度から実施しているもので、2023年度（後期末時点）までに20件の学生の活動を応援した。

「幼児教育支援センターが応援する事業」の実施目的を、以下に示した。

１）保育学部生や短大保育科生のゼミ活動や、教員と学生が協働でかかわる地域ボランティア活動、特色のある授業等を幼児教育支援センターが応援（教材の支給等）することで、保育の学びを活かした学生主体の活動の活性化をはかる。

２）さまざまな活動を通して保育学部生、短大保育科生、学部教員、短大教員、幼児教育支援センター職員等が交流することを通して、学部生短大生それぞれの保育の学びの姿を知り、日々の教育活動に役立てる。

また、具体的応援内容は、次の4点である。

<u>１）活動時の文房具の貸与（レンタル文具で応援事業）</u>

「幼児教育支援センターが応援する活動」認定団体は（教員の許可がなくても）幼児教育支援センターからマジック等の文房具を借りることができる。

２）ワークショップ（自主勉強会）の支援（ワークショップで応援事業）

保育学部教員、短大保育科教員、幼児教育支援センター職員、学生が企画実施する、学生を対象としたワークショップ的活動（勉強会、研究会等を含む）に対して、必要な消耗品（素材、画材等）を現物支給する。

３）消耗品の支給（ボランティア消耗品補助事業）

「幼児教育支援センターが応援する活動」認定団体が、社会貢献的（保育系学生の資質や学びを善用して世の中を明るくハッピーにするような）活動をする際に必要な消耗品（たとえば、子ども対象イベントで使う折り紙等の素材や、景品用のアメや菓子等）を現物支給する。

４）手弁当（ボランティア昼食代補助事業）

「幼児教育支援センターが応援する活動」認定団体が、社会貢献的（保育系学生の資質や学びを善用して世の中を明るくハッピーにするような）活動をする際に、昼食代補助として 1 人 500 円（クオカード）を支給する。

また、保育学部生や短大保育科生のゼミ活動や、教員と学生が協働でかかわる地域ボランティア活動、特色のある授業等を、「幼児教育支援センターが応援する活動」として、本学ホームページに多くの活動を掲載し広報することで、本学学生の「保育の学びの善用」の後押し･後方支援ができるようにした。

2. 実施状況

2021 年 10 月、保育学部と短大保育科の学生に向けて、ポータルサイトにて「幼児教育支援センターが応援する事業」の案内を配信し、学生の自主的な活動に対する文房具の貸出・消耗品の補助・ボランティアの昼食代補助等の申請を受付ける旨を周知した。

翌年度からは、年度初めにポータルサイトにて「応援する事業」の案内を保育学部と短大保育科の全学生に向けて配信している。

これを受けて「応援する事業」には、2021 年度は 4 件、2022 年度は 8 件の申請があり、以下の表 1 のとおりの支援を行った。2023 年は 9 月の時点で 4 件の申請を受付けている。

学生への周知はポータル配信を利用しているが、あまり学生に浸透しているとは言えず、教員が学生に「応援する事業」を利用するよう働きかけることにより学生が申請するという様子が窺えた。今後も教員の理解と協力を得ながら、学生により分かりやすい周知の方法を工夫し、この事業が学生の自主的活動に有効に機能するよう働きかけていきたい。

表１　幼児教育支援センターが応援する事業　2021 年度～ 2023 年度の申請状況

No.	申請日	団体名称 (学部学科・学年)	内容	応援内容
1	令和 3 年 10 月 18 日	とことこキャンプ (短大保育科 1・2 年生・保育学部 2 年生)	幼児を対象とした野外教育活動の指導ボランティア	応援★手弁当 Quo カード 500 円×22
2	10 月 15 日	木下藍と仲間たち (短大保育科 1 年生)	焼津市ターントクルこども館 子どもワークショップのボランティア	応援★手弁当 Quo カード 500 円×4
3	10 月 18 日	常葉短大レク (短大保育科 1 年生)	焼津市ターントクルこども館 木育イベントにおけるレクリエーション支援	応援★手弁当 Quo カード 500 円×6
4	11 月 30 日	とことこキャンプ (短大保育科 1・2 年生)	幼児の自然体験活動(キャンプ)の教材研究のための学生キャンプ	応援★ワークショップ 薪を購入
5	令和 4 年 5 月 12 日	ぱれっと (幼児向け実技サークル)	パレットの宣伝 静岡市内の保育施設にチラシ配付	応援★消耗品 チラシのカラーコピー
6	6 月 16 日	けいちゃんゼミ (保育学部 3 年生)	子ども食堂のボランティア	応援★手弁当 Quo カード 500 円×16
7	7 月 4 日	常葉短大レク (短大保育科 2 年生)	とことこサマーフェスティバル	応援★消耗品 景品の菓子、カラーセロファンの購入
8	7 月 14 日	クローバー (保育学部 3 年生)	静岡県立こども病院の壁面装飾	応援★消耗品 A3 ラミネートフィルム
9	7 月 19 日	ぱれっと (幼児向け実技サークル)	ヤクルトさんさん保育園の誕生日会の公演	応援★消耗品 4 つ切　色画用紙 7 枚
10	10 月 20 日	カツオアートボランティア (短大保育科 1 年生)	焼津カツオ SHOW てん！2022 ワークショップのボランティア	応援★手弁当 Quo カード 500 円×2
11	10 月 20 日	ほんものフィールドワーク (短大保育科 2 年生)	秋の芸術祭＠了善寺	応援★手弁当 Quo カード 500 円×4
12	11 月 10 日	クローバー (保育学部 3 年生)	静岡県立こども病院のボランティア	応援★手弁当 Quo カード 500 円×12
13	12 月 20 日	常葉短大レク (短大保育科 2 年生)	こどもかぜのこまつり	応援★消耗品 景品の菓子の購入
14	令和 5 年 5 月 12 日	常葉短大レク (短大保育科 2 年生)	親子レクリエーション講座(富士宮市主催)の支援	応援★手弁当 Quo カード 500 円×15
15	6 月 29 日	増田啓子ゼミ (保育学部 3 年生)	子ども食堂のボランティア ※9 月現在活動中	応援★手弁当
16	6 月 16 日	常葉短大レク (短大保育科 1 年生)	親子富士登山講習会(富士宮市主催)の支援	応援★手弁当 Quo カード 500 円×4
17	7 月 10 日	常葉短大レク (短大保育科 1・2 年生)	とことこサマーフェスティバル	応援★消耗品 マジックテープ、菓子の購入
18	10 月 11 日	木下藍と仲間たち (短大保育科 1 年生)	親子日本文化体験ワークショップボランティア	応援★手弁当 Quo カード 500 円×3
19	12 月7日	クローバー (保育学部 3 年生)	静岡県立こども病院ボランティア	応援★手弁当 Quo カード 500 円×13
20	令和 6 年 1 月 26 日	赤塚ゼミ (保育学部 3 年生)	ひまわり講座(発達障害のある子どもとの交流)	応援★消耗品 カラービニール袋

3. 応援する事業に関連するその他の企画

(1) 心薙祭（大学祭）における企画

「幼児教育支援センターが応援する事業」が立ち上げられたのと並行して、幼児教育支援センター職員の発案で、2021 年度の心薙祭（大学祭）において保育学部生・短大保育科生の研究活動を紹介する企画を実施した。「保育処」と称して学生有志の研究発表の参加を呼び掛けたところ、10 件の申込みがあった。この中には、「応援する事業」を利用した団体の活動の発表もあり、応援した活動の様子を心薙祭で紹介することにも繋がった。また、参加展示にはゼミの発表や授業の取り組み、個人作品などがあり、保育学生の日頃の活動の一端を紹介することができた。引き続き 2022 年度は、名称を「保育ドコロ」として同様に実施し、9 件の参加があった。2021 年度、2022 年度の参加状況は以下の表 2 のとおり。2023 年は「保育ピアッツァ」と名称を変えて参加者を募集している。

心薙祭当日は、参加学生と幼児教育支援センタースタッフで運営を行った。企画の位置づけは自主的活動であるためスタッフはボランティアで準備から片付まで様々な形で協力してくれた。

学生の発表の絶好の機会である心薙祭を今後も活かしたいと考えるが、学生には強制ではなくあくまでも自主的な参加となるように、どのような位置づけで、どうバランスをもって継続できるかが課題であると感じている。

表 2　2021 年度　心薙祭「保育処」参加者・参加団体一覧

No.	展示物のタイトル	団体名（学部学科・学年）	発表形態
1	手作りおもちゃと紙版画・スチレン版画	図画工作Ⅱ受講メンバー （短大保育科 2 年生）	造形物展示
2	徹底解説　児童相談所！	山屋ゼミ （保育学部 3 年生）	ポスター発表
3	めざせ「あそび名人」	「子どもの遊びと発達 A」受講メンバー （短大保育科 2 年生）	造形物展示
4	絵本のもり	石山ゼミ （保育学部 2 年生）	ポスター発表
5	ぱれっと 4 年生による活動報告	サークルぱれっと （幼児向け実技サークル）	ポスター発表
6	◯野菜の名前はなあに？ ◯手作り絵本	個人参加 （保育学部 3 年生）	造形物展示
7	オリジナル絵本	個人参加 （保育学部 3 年生）	造形物展示
8	Let’s dancing♪	富田ゼミ （保育学部 2 年生）	ダンス動画の放映
9	とことこキャンプ　実践報告	とことこキャンプ （短大保育科 1 年生・2年生）	ドキュメンテーションの展示
10	短大生のボランティア活動	木下藍と仲間たち　常葉短大レク （短大保育科 1 年生・2年生）	ポスター発表

表 3　2022 年度　心薙祭「保育ドコロ」参加者・参加団体一覧

	展示物のタイトル	団体名	発表形態
1	こども病院の食堂を飾る世界旅行の壁面装飾	クローバー（石山ゼミ） （保育学部 2 年生）	造形物展示
2	図画工作Ⅱ展示	図画工作Ⅱ履修生 （短大保育科 2 年生）	造形物展示
3	災害時の緊急託児ボランティア	トコトコほいく ボランティア有志 （保育学部 4 年生）	ポスター発表
4	手作り「どうぶつかるた」	個人参加 （保育学部 4 年生）	造形物展示
5	とことこサマーフェスティバル	レクリエーション援助法/レクリエーション論受講生 （短大保育科 1･2 年生）	ポスター発表
6	子ども食堂にボランティアに行こう！	増田啓子ゼミ （保育学部 2 年生）	ポスター発表
7	保育ゼミナール「とことこひろば」授業紹介	加藤寿子ゼミ （短大保育科 2 年生）	ポスター発表
8	いっしょに踊ろうトコトコ Dance Party	富田ゼミ （保育学部 2 年生）	ダンス動画の放映
9	幼児向け実技サークル はれっとの活動紹介	ぱれっと （幼児向け実技サークル）	ポスター発表

表 4　2023 年度　心薙祭「保育ピアッツア」参加者・参加団体一覧

	展示物のタイトル	団体名	発表形態
1	医療保育資格についての探究発表	石山ゼミ （保育学部2年生）	ポスター発表
2	子どものためのダンス･体操	石山ゼミ （保育学部2年生）	「子どものあそびば」での子ども参加型実演
3	子ども食堂	増田ゼミ （保育学部2年生）	ポスター発表
4	ふしぎな光や影で遊ぼう！	三原ゼミ （保育学部4年生）	ポスター発表
5	みんなで Let’s Dance	富田ゼミ （保育学部2年生）	ダンス動画の放映
6	子どものためのダンス･体操	富田ゼミ （保育学部2年生）	「子どものあそびば」での子ども参加型実演
7	仮装用ペストマスク	個人参加 （保育学部1年生）	造形物展示
8	実践報告「光と影遊び」	個人参加 （保育学部4年生）	ポスター発表

9	手作りおもちゃのもり	杉浦先生と1年生 （保育学部1年生）	造形物展示
10	トコトコのもり	保育学部・短大保育科	ポスター発表
11	子ども理解体験	短大保育科「子ども学概論」 （短大保育科1年生）	ポスター発表
12	手作りおもちゃ「0、1歳の子どもへ」	短大保育科・「教職実践演習」 小倉グループ（短大保育科2年生）	造形物展示
13	とことこサマーフェスティバル	短大保育科「乳児保育演習」 短大保育科「レクリエーション論」 短大保育科「レクリエーション援助法」	ドキュメンテーションの展示
14	子育て支援活動「とことこひろば」	短大保育科「保育ゼミナール」 （短大保育科2年生）	ドキュメンテーションの展示
15	2024 とことこキャンプのドキュメンテーション	短大保育科・保育学部 とことこキャンプ キャンプカウンセラー	ドキュメンテーションの展示

写真１　心薙祭での展示の様子

(2) とことこピアッツァ「ドキュメンテーションのリレー」

心薙祭「保育処」を実施してみての印象から、「日頃より研究発表の機会を設け、お互いの活動を身近に感じて発表したいという意欲を持てるように出来たら良いのではないか」という構想が浮上した。短大保育科の教員から企画化の提案があり、2022 年 12 月より「ドキュメンテーションのリレー」として実施された。

写真２ 「ドキュメンテーションのリレー」展示の様子

「ドキュメンテーション」とは、写真を活用した保育記録のことであるが、「ドキュメンテーションのリレー」とは、ゼミやグループでの活動を学生がドキュメンテーションの形式で自由に表し、リレーで繋いでいく（次の団体を指名し､バトンパスしていく）ものである。具体的には､C 棟 3 階の学生スペースの壁面を利用し、A1 サイズのパネルで学生のドキュメンテーションを展示することになった。

展示の際は、2022 年 12 月に学生にポータル配信で「ドキュメンテーションのリレー」の参加者募集を呼び掛け、2022 年度に 4 件、2023 年 9 月までで 2 件の参加があった。初年度の 2022 年度には、学生の参加促進のための楽しい仕掛けとして、センター職員の発案による「幼児教育支援センター課長賞」が設けられ、当選した学生にささやかなプレゼントが贈られた。

4. 事業の成果

(1) 学生自身が選ぶ「自由な活動」の中にある、豊かな学びへの気づき

事業の成果として、学生の自由な活動の中にある豊かな学びに教職員が気づくという側面があった。以下、「幼児教育支援センターが応援する事業」の支援を受けた学生活動から、具体的事例を紹介する。

1) 事例 1　ターントクルこども館「焼津カツオ SHOW てん！」ワークショップボランティア

この活動は、焼津市ターントクルこども館が主催する企画で、カツオを象った木製プレートに、子どもたちが自由に絵付けをして、思い思いのカツオを作るワークショップであった。「焼津カツオ SHOW てん！」とは、遠洋漁業の基地である焼津で水揚げ･加工される「カツオ」をモチーフとして、アーティストがさまざまな表現形態で「カツオ」を制作し、駅前通り商店街に展示して来訪した市民が楽しむイベントであったが、このワークショップはそのイベントの一環として企画されたものである。

以下、学生の感想文を引用する。

学生の感想文

木のプールに敷き詰められた木でできた卵を横に並べて、的当てゲームを始める子どもや、収穫遊びができるコーナーで直売所ごっこをしている子どもなど、ひとつのテーマから発想を膨らませ、周りを巻き込みながら独自の世界を展開させていく子どもの姿が見受けられました。今回の経験を通して、遊びと、遊びにおける環境が、どれだけ子どもの発達や成長に影響を与えているかを強く感じることができました。また、保育園や幼稚園とは違い、本当に多種多様な環境が用意されていたため、子ども一人一人の、より個性に溢れた表現を感じ取ることができました。大学の講義で説明された、月齢、年齢別の子どもの発達に応じた遊びを観察することができ、まさに百聞は一見にしかずだと感じました。

2) 事例 2　富士宮市教育委員会社会教育課「親子富士登山講習会」

この活動は、富士宮市教育委員会社会教育課主催の親子対象事業で、短期大学部保育科のレクリエーション論の受講学生がプログラム立案と指導実践を行ったものである。大学キャンパス内では指導実践を行うことが難しい親子対象の自然体験活動の指導の実際について、企画、指導法、安全管理等を実践

的に学ぶ機会となった。また、保護者や富士宮市の職員の方から学生が即時に直接のフィードバックを受けることができ、学内では達成しえない学びを得る機会となった。

写真 3　学生の指導実践の様子（自由な活動により学内では達成しえない学びを得る）

（2）学びの場としての大学に、楽しく創造的な雰囲気をもたらす

本事業の実施期間の背後には、いつ終わるとも知れない「コロナ禍」が横たわっていた。しかし、その渦中にあっても、保育の現場では常に「子どもの生活をより楽しく、より豊かに」する工夫があった。筆者（遠藤）が実習訪問指導の折に見聞きした中にも「例年のような運動会ができないので、お迎えの時間に毎日のように運動会種目を模したあそびを行っている」などの例があり、保育者の知恵と工夫に心から感服したものであった。同様に、大学という学びの場でも、コロナ禍によって大幅な制限が加えられたが、大学が行動制限の内容を明確に示したため、逆に「こういうことならできる」「これならやってよい」ということが明らかとなった。ピンチはチャンスと良く言われるが、コロナ禍によって「子どもたちのためにやりたいこと」を実現すべく、小規模なボランティア活動に創造的な工夫を行う機運が生じたともいえる。

一例として、短大保育科の活動を紹介したい。学生が工夫した戸外あそびコーナーを草薙キャンパス芝生広場に開設し地域の親子に楽しんでもらうという「とことこサマーフェスティバル」は、初年度は単一授業の受講者による小規模な自主活動としてスタートしたが、そこに参画した他授業担当の教員が「今回これができたのであれば、次はこういうこともできそうだ」とアイデアを膨らませ、学生に誘いかけることによって「こどもかぜのこまつり」へと発展し、次年度の「とことこサマーフェスティバル」へとつながった。さらには、学生の中に醸成された「こうやったらできる」というマネジメント感覚が、2023 年度大学祭での「こどものあそびばトコたんランド」へと引き継がれている。このように、学生自身が、個人として、また集団として身に付けた「楽しい場づくりを行うためのノウハウ・マネジメント感覚」が持続可能なものとなり、幼児教育支援センターの応援事業を離れたところでも自然に展開している。保育の学生は、このような実践的な感覚を「実際にやってみることを通して」学びとることが極めて得意である。やってみたいことを実現させるまでの壁は学生にとって高いが、幼児教育支援

センターによる物的支援と具体的手助け（心理的支援）によって、学生の力で乗り越えられるところまで自然に下がる。これが、「幼児教育支援センターが応援する事業」に隠された本質的意図であるように思う。同じことを、別の言い方で表現してみたい。幼児と長なわ遊びをするときに、保育者は子どもの動きをよく見て、幼児が跳べるように長なわを操作することがとても大切である。保育者の身体が生み出すリズムが幼児に伝わり、それを通して幼児自身の身体に心地よく刻み込まれたリズム感覚と技術が、さまざまな運動や身体表現を自ら導く基礎となる。これを、訓練として行うのではなく、子どもの自発性を誘う「あそび」として行っていくのが、保育である。「幼児教育支援センターが応援する事業」は、学生の身の丈や能力に併せて長なわを回し、ほんとうに跳べる力・自ら動ける力を育む保育者の役割を果たしているのではないだろうか。このようなところに、「幼児教育支援センターが応援する事業」の意義を改めて確認することができる。

5. おわりに　今後にむけて

最後に「幼児教育支援センターが応援する事業」が、なぜこのようなネーミングになったのかに触れておきたい。2022 年度まで幼児教育支援センターの就職支援員としてご尽力いただいた大井弘美先生が、5 月の短大保育科２年生の就職進路ガイダンスで、学生に対して以下のようなサプライズを贈ってくださったことがあった。「それでは、来週から教育実習に行くみなさんを応援します！（太鼓を取り出し）フレ～～～（ドン！）フレ～～～～（ドン！）ほ～い～く～科～～～！　フレッフレッ保育科　フレッフレッ保育科　ワ～～～～～（ドンドンドンドンドン…）」。これに心の底から感銘を受けた筆者（遠藤）は、時折思い出して自らの心を温めていたが、本事業の企画時にも自然とこのことが思い出されたため、これに因んで「幼児教育支援センターが“応援”する事業」と名付けて提案した。このネーミングが、誰からの異論もなく幼児教育支援センター会議を通過したため、現在に至っている。

幼児教育支援センターは、主に学生の保育実習・教育実習の支援と就職支援をする組織であるが、その業務を通して、社会の中で実際に働くということ、特に子どもたちのために働くということの本質的なところを伝えることができる学内唯一の組織でもある。近年、保育職の厳しさがクローズアップされることが多く、その楽しさが隠れてしまっているように感じる。保育の楽しさは、保育者の側に自ら楽しさ・面白さを感じようとする主体性がなければ感じ取ることができない。だからこそ、私たちは、全ての学生の内にある主体的な自己を育むような教育方法を工夫していく必要がある。

子ども主体の保育を進める中で「共主体」としての保育者の在り方が問われている。「幼児教育支援センターが応援する事業」は、ささやかな事業ではあるが、子どもとの生活を創造的に楽しむ共主体としての保育者を育てようとしている。現時点で、応援事業への学生の認知度を高めること、学生の主体的な参画をどのように支えていくかということが、本事業の課題となっている。この解決に向けて、応援事業の仕組みの改善もさることながら、教職員による学生に対する応援のまなざしや言葉がけという素朴な実践が学生を支え意欲を引き出しているという事実に立ち返ることも大切であると思う。その安心感により、学生は行動範囲を広げ、自己の内に力を蓄えていくことができる。

もしかしたら、近年の学生活動の指導をめぐる種々の課題の突破口は、学生活動に対する「共主体」

としての教員の在り方にあるのではないだろうか。個人的なことになるが、筆者（遠藤）の学生時代を振り返ると、わが師は実践の場に常にいて、師の眼前で野外教育の指導実践を任されるのが、弟子である学生の立場であった。その際の、緊張と安心が同居するあの心持ちは、30 年近い時を経た現在でも昨日のことのように思い出される。

保育系の学部学科は、志望学生の減少により、全国的に厳しい状況がある。この現状の中、保育職を志す学生はまさに金の卵であり、その成長を大切に見守りたい。学生の主体性の発揮を「待つ」姿勢と「あそび心」のある「応援事業」は、学生自身が力を蓄え自らの歩みを進めてもらいたいと願う、さらにはそのように歩み出す学生の姿を心待ちにしている教職員の心の内を反映するものなのではないだろうか。昔も今も、よい学生教育・保育者養成を行っていくうえで、学生の自立を温かく見守る教職員の安定感と心の余裕は欠かせない。今後も、「幼児教育支援センターが応援する事業」を創造的に発展させながら継続し、第三の学生指導の場として活用していくことが望まれる。